



# 分担研究報告

# 2

## 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

研究分担者：西田 一雄（日本赤十字社 血液事業本部）

研究協力者：瀧川 正弘（日本赤十字社 血液事業本部）

安藤 正吉（日本赤十字社 血液事業本部）

青木 禎男（日本赤十字社 血液事業本部）

大津 萌由（日本赤十字社 血液事業本部）

### 研究要旨

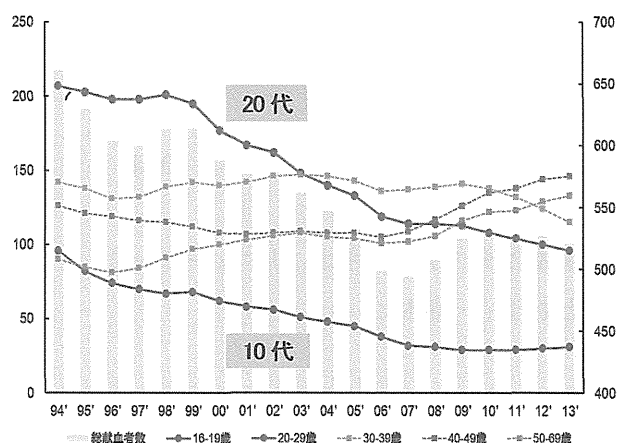
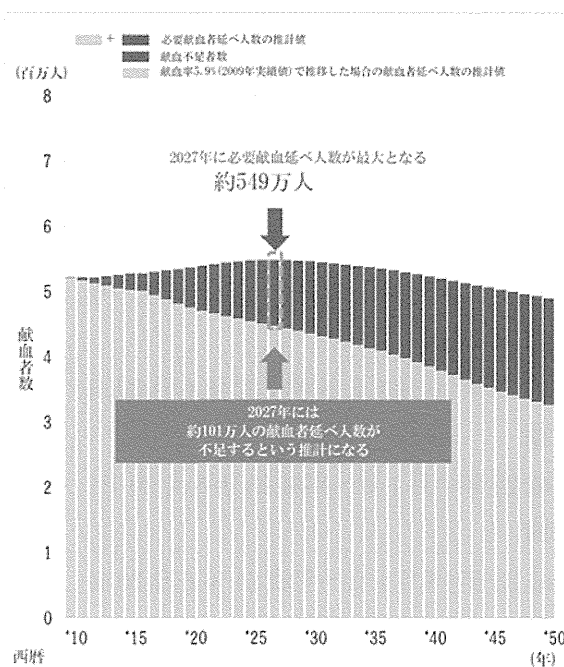
医学の進歩によって臓器移植が可能になるなど、治療における輸血用血液製剤の需要は高まり、特に、改正臓器移植法の施行に伴い緊急かつ大量輸血の事例が増加している。今後安全な血液を如何に安定的に確保するかが重要な課題である。厚生労働省が実施した若年層意識調査の結果及び検証を踏まえて検討された「献血推進のあり方に関する検討会」報告においても輸血用血液製剤の需要の増加にも拘わらず、若年層の献血離れの傾向に歯止めがかからないことが指摘されている。その理由が明らかにされていないことから、平成21年度から本研究において献血推進における広報の効果に関する研究を実施してきた。今後は、安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のために、これまでの研究を踏まえ、献血の実情を明らかにし、その原因の解明を行い、さらなる対策を提示することが重要と考えられる。

### 研究目的

日本赤十字社が平成22年に行った血液需給将来推計シミュレーションでは、当時の献血率（献血可能人口の献血率5.9%）のまま少子高齢化が進展すると、需要がピークを迎える平成39年（2027年）には、献血者約101万人分の血液が不足することが予測された。（その後、平成26年度に改めて行った同シミュレーションでは約85万人に修正。）

今後の安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のためには、献血の実情を明らかにする必要がある、その中でも、ここ10年で32%も献血者数が減少している10代、20代の若年層に献血離れの現象がある。そこで新たな方策として、献血推進に向けた戦略的な広報を開発する必要があると考えられる。

本研究は、需要量に見合った献血量を安定的に確保し、安定供給を図る上で極めて重要であり必要性は高い。



## 研究方法

平成 21 年 10 月から、メディアを活用した戦略的な広報展開として、インターネット、携帯サイト、ラジオ放送（継続した全国放送、地域における放送）等による広報や、よりインパクトのある音楽イベントによる啓発等を軸とした、通年での継続性のある展開を図り、広報後の献血行動の分析から広報の効果の評価する。

献血推進の広報に必要な伝えるべきメッセージは何か、特に若年層にメッセージを伝える媒体や伝達方法などを十分に解析、検討して、広報の戦略を立て、広報の効果については献血者の属性毎の人数の分析やキャンペーンによる広く国民からのメッセージ収集等を行い、献血の意識付けも含めた評価を行う。

## 研究結果

LOVE in Action プロジェクト（以下「プロジェクト」と略す）における主な実施事項

### ① 全国におけるラジオ放送の実施

JFN（株式会社ジャパンエフエムネットワーク）38 局による全国ネットでの放送。プロジェクトリーダーのラジオDJ 山本シュウ氏と第3期からはフリーアナウンサー、キャスターとして各メディアで幅広く活躍されている小林麻耶氏による番組を放送。

#### 第1期

平成 21 年 10 月 1 日～平成 22 年 6 月 30 日

#### 第2期

平成 22 年 7 月 1 日～平成 23 年 6 月 30 日

#### 第3期

平成 23 年 10 月 1 日～平成 24 年 6 月 30 日

#### 第4期

平成 24 年 7 月 1 日～平成 25 年 6 月 30 日

#### 第5期

平成 25 年 7 月 1 日～平成 26 年 6 月 30 日

#### 第6期

平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 6 月 30 日

※平成 23 年 7 月～9 月は、リニューアルにともない一時休止



### ② 各地域におけるラジオ放送の実施

後援団体である JFN（株式会社ジャパンエフエムネットワーク）加盟各局番組内における啓発を実施（各局 1 番組～3 番組で約 10 分程度）

### ③ 各地におけるイベントの実施

（平成 27 年 2 月 28 日時点）

北海道札幌市、青森県青森市、青森県上北郡、秋田県秋田市、岩手県盛岡市、宮城県仙台市、福島県郡山市、新潟県新潟市、静岡県浜松市、愛知県名古屋市、富山県高岡市、石川県金沢市、岐阜県大垣市、滋賀県大津市、京都府京都市、大阪府大阪市、大阪府堺市、兵庫県神戸市、岡山県岡山市、広島県広島市、香川県高松市、徳島県徳島市、高知県高知市、福岡県福岡市、宮崎県宮崎市、鹿児島県鹿児島市、沖縄県那覇市



### ④ 若年層に人気のあるブランド、アーティスト、イベントとのコラボレーションを実施

若年層に人気のファッションブランドとコラボレーションし、ブランド商品へのロゴマークの掲示や、アーティストとのコラボレーショングッズの制作、人気イベントに専用ブースを設置し広報資材の配布や映像配信等を実施。



⑤ 各種広報との連動

通年で実施しているプロジェクトを軸に各種広報を連動させることにより、より効果的な啓発を実施。

特に、はたちの献血キャンペーンに関しては、プロジェクトに賛同していただいたアーティストが、キャンペーン CM の楽曲を提供してくれることにより、記者発表会でのメディア効果や CM 放映等、インパクトのある啓発を実施。

※CM ソング賛同アーティスト

メティス、ゆず、MONKEY MAJIK、平井堅、AAA、GReeeeN

⑥ 音楽イベントの開催

第1期 グランキューブ大阪

C.C. レモンホール (現渋谷公会堂)

※応募総数 8,220 人、来場者数は、3,980 人

第2期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 70,982 人、来場者数は 19,485 人

※サブ会場として日本製紙クリネックススタジアム宮城 (1日目のみ)

第3期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 62,372 人、来場者数は 16,037 人

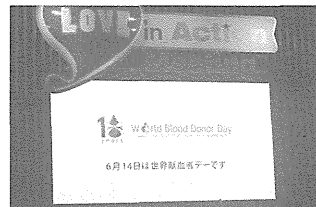
※全国 6 会場の映画館で映像配信 (1日目のみ)

第4期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 80,319 人、来場者数は 16,010 人

第5期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 82,581 人、来場者数は 16,150 人



若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すことを目的に、通年で実施してきたプロジェクトについて以下の結果が得られた。

① 平成 21 年度の献血者数は、5,303,431 人、平成 22 年度 5,329,676 人、平成 23 年度 5,250,866 人、平成 24 年度 5,249,728 人、平成 25 年度 5,156,325 人となっており、平成 19 年度の 4,955,954 人以降 500 万人を割ることなく推移している。

年代別にみると、平成 21 年度の 10 代は 293,696 人 (人口比 6.0%)、20 代は 1,126,931 人 (人口比 7.8%)、平成 22 年度 10 代 295,775 人 (人口比 6.1%)、20 代 1,080,814 人 (人口比 7.9%)、平成 23 年度 10 代 285,021 人 (人口比 5.8%)、20 代 1,018,234 人 (人口比 7.5%)、平成 24 年度 10 代 298,923 人 (人口比 6.2%)、20 代 992,779 人 (人口比 7.5%)、平成 25 年度 10 代 304,820 人 (人口比 6.3%)、20 代 943,044 人 (人口比 7.2%) であり、10 代については、2 年連続で献血者数、献血率とも増加し、プロジェクトを開始した平成 21 年度以降で最高値であった。

② ラジオによる啓発については、後援団体である、株式会社ジャパンエフエムネットワーク (全国 38 局) 加盟局のネットワークを通じ、全国に献血の情報を繰り返し放送した。

第 1 期～第 5 期においてリスナーから 10,000 通を超える投稿が寄せられている。

また、投稿数に占める若年層 (29 歳以下) の割合についても増加傾向にある。

③ インターネット調査 (全国の 16 歳～69 歳男女、各 2,000 人対象) の結果から、プロジェクトの認知率は、第 1 期 8.9%、第 2 期 17.3%、第 3 期 21.0%、第 4 期 22.1% と増加している。第 4 期においては、特に 10 代、20 代の女性の認知率が大きく増加した。

認知経路としては、ポスター、テレビ CM、献血会場が上位を占めており、特に若年層については、テレビ CM、テレビ番組が認知経路として増加している。第 4 期におけるラジオの認知経路が高かったのは、20 代～40 代となっている。

また、プロジェクトを知ったことによる意識や

行動の変化として、「献血をしたくなった」は、第 1 期 10 代 31.6%、20 代 22.6%に対し、第 2 期は、10 代 40.8%、20 代 29.3%、第 3 期は 10 代 42.7%、20 代 24.4%、第 4 期は 10 代 43.2%、20 代 32.6%、「実際に献血をした」は、第 1 期 10 代 3.3%、20 代 5.4%に対し、第 2 期は、10 代 20.8%、20 代 28.4%、第 3 期は 10 代 17.8%、20 代 30.5%、第 4 期は 10 代 19.7%、20 代 19.6%となっており、献血への意識が高まった効果が見られた。

## 考察

全国的に通年で実施しているプロジェクトについては、ラジオ放送、インターネット、各地でのイベント等による献血啓発や、よりインパクトのある音楽イベント等を軸とし、継続した展開を実施したことにより、平成 24 年度、平成 25 年度と 2 年続けて 10 代の献血者数及び献血率が増加したことからも、若年層を中心にメディアを活用した戦略的な広報として、一定の効果があるものと推測される。

## 結論

プロジェクトについては、2009 年のスタート以来様々な広報展開を実施し、若年層に対しての献血への理解、動機付けをし、最終的に献血そのものへ繋げるための手段及び広く国民への周知、特に献血ができない年齢の若年層（15 歳以下）への啓発を実施してきたが、これまでの研究結果や 2 年続けて 10 代の献血者及び献血率が増加したことから、引き続き、若年層と同じ目線で対話のできる学生献血推進ボランティアや同世代の著名人やプロジェクトに賛同いただいている若年層に対し大きな影響力を持つ著名人等の協力を得ながら、継続していく必要があるものと考えられる。

同時に、インターネット調査等の研究結果から、「献血啓発」から「献血行動」に移行することは容易でないことが推測できることから、献血啓発の継続とともに、啓発後の献血行動への移行に向けた取り組みについて、アンケート調査等の効果測定を強化し、今後の展開に活用していく必要があるものと考えられる。

## 健康危険情報

該当なし

## 知的財産権の出願・取得状況

該当なし

# 3

## 献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究

研究分担者：田辺 善仁（株式会社エフエム大阪 代表取締役社長）

研究協力者：林 清孝（株式会社エフエム大阪 常務取締役）

### 研究要旨

今後の若者献血行動の促進を行うために、献血に対する意識調査を実施。

### 研究目的

若者に対して献血への動向及びその重要性と理解度を測るための意識調査を実施する。

### 研究方法

大阪御堂筋にある御堂筋献血ルーム「CROSS Cafe」において毎週土曜日にライブイベントを実施。特に高校生によるライブを実施し意識調査を聞きとる。また、2015年2月22日に開催される「SDD ライブ 2015」において献血の意識アンケート調査を実施することになっている。

#### （倫理面への配慮）

聞き取り調査については、個人情報の取り扱いについては㈱エフエム大阪のプライバシーポリシーに則り適宜対応した。

### 研究結果

毎週土曜日に関西在住のインディーズアーティストの出演によるライブを御堂筋献血ルーム「CROSS Cafe」で実施し、特に月に一回程度で「高校生の日」を設け、咲くやこの花高校を中心に14校の高校の、軽音楽クラブのライブを実施し、10代のリアルな意識を発信できるようにした。当日に献血する高校生や学校内で献血についての話題が広がっている。



図2 咲くやこの花高校軽音楽クラブの様様

音楽を主体に活動しているプロあるいはセミプロといったゲストミュージシャンからその幅を広げた展開を行い、8月には昨今のブームであるご当地アイドルの代表として人気急上昇中の「Le Siana (ルシヤナ)」が登場し、当日の来場者数が30名を超える最高記録となった。



図3 ご当地アイドル「ルシヤナ」



図1 月に1回開催の高校生の日

表 1 2014 年度御堂筋献血ルーム毎週土曜に開催の

## ライブイベントの視聴者データ

2014 年度イベント番組 『Brand-new Blood @ CROSS CAFE』 視聴者数データ				
実施月	USTREAM (リアルタイム)	USTREAM (アーカイブ)	ニコ生 (リアルタイム アーカイブ 7日間)	合計
4月	247	162	494	903
5月	240	215	739	1194
6月	561	309	797	1667
7月	336	378	777	1491
8月	323	1052	737	2112
9月	175	988	595	1758
10月	256	515	623	1394
11月	182	881	609	1672
12月	150	695	532	1377
1月				
2月				
3月				
合計	2470	5195	5903	13568

FM 大阪番組出演ガクスイメンバーによる聞き取り調査 (抜粋)

## ★ماميさん (21 才) アヤカさん (21 才)

※献血はやったことがない

※注射が苦手

※血液が不足しているというニュースなどを見ると、献血したほうが良いという思いは持っている

※周りではやっている人もいるし、人の助けになりたいから将来的には献血をしてみたい。

※お菓子がもらえるのはいいな。

## ★キョウカさん (15 才) ノリコさん (15 才)

※来年になったら献血できる年齢に

※したほうが良いとは思いますが、ちょっと怖い

※血液が不足しています。というチラシを手にしたことはある

※家族には献血している方もいる。

## ★ココアさん (18 才) リクさん (18 才)

※ココアさん献血したことある。16 才の記念にお母さんと行って、血液型も初めて知った

※検査も含めて 30 分くらい、ベッドで横になっているうちに眠くなった

※今度お友達のリクさんと一緒に行きます

## ★ともかさん (20 才) みうさん (20 才)

※献血は学校に来た献血バスでしたことがある

※恐くはなかった。針を見ないようにした。

※ちょっといいことした感じ

## ★キョウコさん (20 才) トモキさん (19 才) リョウタさん (19 才)

※(キョウコさん) 結構いつている 3 カ月とか半年に 1 回程度

※それぐらいしか、社会のためにできないことがない。

※役になったなという気持ちになれる

※(リョウタさん) 1 回だけしたことある。

※役に立たない実感はあるけど、痛かった。

## ★ユウキさん (21 才) マイさん (22 才) タケツグさん (19 才)

※ユウキさんは血液は取ってもらったことはあるけど、採血しただけで。

※マイさんは貧血ぎみなので、献血は NG

※タケツグさんは、献血活動の場面は見てるものの、自分からやろうと思ったことがない

※友達から聞いた話で、いろいろもらえるらしいから、それなら行ってみたいと思っている。

※献血することで、自分にほかの血液が混ざったりしないのか不安

## ★ماميさん (16 才) リナさん (16 才) 高校 2 年生

※献血はしたことない。

※注射が苦手、でもやったほうが良いし、やってみたいとは思っている

※献血バスはよく見かけるけど、献血ルームのことは知らなかった。

※学校などに来たらもらえたら、入りやすいけど、駅前に止まっている献血バスなどは入りづらい。大人の人のほうが多いし、高校生が入っているのかどうか不安に



なってる。

★ユリさん (20 才) アミさん (20 才)

※やってみようと思ったことだけはある。

※なかなか、行くアレにならない。

※いろんなサービスがあったりでよかった

※献血ルームの存在はあまり知らなかった。

★ケイスケさん (20 才) ヨシヒサさん (20 才)

※どちらも献血の経験はなし。

※献血に対する意識は薄い「大事だとは思うけど、誰かがやるだろうなあ」と思ってしまう。

## 考察

エフエム大阪の放送では、毎週火曜日の夜 9 時 30 分に近畿大学、大阪産業大学、大阪福祉大学のガクスイメンバーによる大阪 12 の献血ルームにインタビューを行い、番組で放送している。また、毎週金曜日の夕方 6 時 30 分には番組「愛ですサークル」として、各血液型の備蓄状況を、天気予報のように伝えている。これによりリスナーの関心と初動を促すことができる。そして、具体的な行動として、御堂筋献血ルームでライブイベントを実施することで、その場で献血の体験を実施することができている。

このような毎週の地元における血液型別在庫情報の広報などが更に広がれば、献血の重要性が更に広がると考えられる。また、各献血ルームで展開する各種サービスやイベント情報を知らない人が多く、献血推進する側の努力を伝える必要がある。

## 結論

安定的に献血者数を増やすためには、献血初体験者を恒常的に増やすことが重要であり、次に初体験者を二回目に誘導することが必要となり、そして、複数回献血クラブに参加させるようにすることが重要です。目標として男子は年 3 回、女子は年 2 回として、その間を成分献血でつなぐ工夫が必要と考えられる。そのためには不断の広報展開と実体験の場が必要かと考える。

## 健康危険情報

該当なし

## 知的財産権の出願・取得状況

該当なし

## 研究発表

該当なし



## 4

## 輸血液の需要に関する研究

## 長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査

研究分担者：秋田 定伯（長崎大学病院 形成外科）

研究協力者：江藤 栄子（長崎大学病院 看護部）

宮崎 智子（長崎大学病院 看護部）

長池 恵美（長崎大学病院 看護部）

濱本 洋子（長崎大学病院 看護部）

## 研究要旨

献血・輸血に対して意識が高いと思われる医療職を目指す長崎大学医学部保健学科（看護科、理学療法科、作業療法科）を対象に意識調査を実施し、献血する側の若い世代に、アンケートに答えてもらうことで、献血・輸血の重要性を意識づけ、献血推進の広報活動となる行動変容を期待し、被験者の属性、自由記載とともに、献血に対する認識の調査を実施した。これまでの調査で献血を忌避する理由の一つとして挙げられた献血時採血時の疼痛のフェイススケール、輸血を想定した際の4段階選択調査を実施し、これまでの当研究班でのデータを踏まえて検討した。さらに、過去2年間の結果を踏まえ、献血の際の痛みが献血を忌避する理由としてあげられていたことからフェイススケールを用いて0～5までの6段階で許容範囲を検討した。

平成26年度は保健学科全体では、合計391名（85.2%）、看護科では250名（81.7%）とやや低下したものの、理学（PT）、作業（OT）療法科では、おのおの71名（93.4%）、70名（90.9%）と高回収率を得た。4学年中、20代は60.1%と最も多く、次いで10代は37.1%であった。献血回数経験の全くないものが80.3%で最も多く1～5回が16.1%、6回以上の経験者も2.8%存在した。

献血を敬遠するかの質問に対して、敬遠するものが全体で61.5%であったが、献血経験者では75.7%がそのように思わないと回答であった。献血未経験者が献血を敬遠する理由は、何となく不安・針を刺すのが痛く嫌・恐怖心・血液を採られるのが嫌などの心理的、身体的な危害をあげる者が、54.6%で最も多く、次いで時間がかかる・時間がない（23.4%）、健康上できない（10.9%）である。一方、献血経験者では、時間がかかる・時間がない（48.5%）、何となく不安・針を刺すのが痛く嫌・恐怖心・血液を採られるのが嫌が続き（33.3%）、献血場所が分からない・入りづらいとした者も9.1%いた。

また、献血経験者に献血の際の痛みについてフェイススケールによる痛みの程度評価では0と1を合わせて77.1%であった。また、痛みに対する許容範囲は献血経験者で2の軽度の痛みが45.9%であり、3の中等度の痛みでも14.9%が許容した。一方、献血未経験者では2の軽度の痛みを許容する者は46.8%に対し、3の中等度は8.9%と低下した。

献血の状況についての質問には、若年層の献血減少を知っている者が、55%であり、他人に献血を勧める者が14.3%となっている。また、献血推進へは36.6%が協力的すると回答し、献血キャンペーンのマスコットである「けんけつちゃん」の認知度も77.7%に及んだ。

## 研究目的

平成21年度～23年度の輸血した患者さんへの疫学的視点からのアンケート調査結果を踏まえて、一昨年度から長崎大学医学部保健学科学生、大学病院に献血、輸血に対する意識と意見を収集・解析し、

献血する側の若い医療者世代の献血の重要性の意識づけと輸血需要の献血推進広報活動となる行動変容を期待しつつ、最終的に最近減少傾向にある若年者層へ献血活動の低下に対する提言と、新たな提案を計ろうとする。

## 研究方法

長崎大学医学部保健学科 全学生対象献血・輸血アンケート調査

平成 26 年 6 月～7 月にかけて、長崎大学医学部保健学科（看護科、理学療法科、作業療法科）に本研究とは無関係な授業終了時にアンケート調査を配布・回収した。アンケート調査は、性別、年齢、学科、学年、献血経験回数、献血経験者に対する初回献血年齢、献血場所、情報入手方法、献血しようと思った動機、献血を敬遠するか否かの確認とその理由、現状の献血状況、他人へ献血を勧めるか否か、はたちのキャンペーンの周知度、献血キャラクターけんけつちゃんの認知度、献血広報活動への参加意思の有無など選択記載していただき、輸血を受けた

（と想定して）の 15 項目の 4 段階選択（4=大変そう思う、3=そう思う、2=あまり思わない、1=思わない）アンケートを作成し、選択していただいた。内容は①身体面に関すること、②精神面に関すること、③輸血そのものに関すること、④輸血の安全面に関すること、⑤献血への意見などにわけ、血漿血液製剤などを含めた内容であり、15 項目中 4 項目は negative な質問であった。更に痛みに対する許容度を 0～5 までの 6 段階評価しさらにアンケート調査表には、今回の輸血以前の献血経験の有無 2 者選択していただいた上で、輸血に対する意見、献血に対する意見については自由形式で記入していただいた。

### （倫理面への配慮）

アンケート調査は全て無記名とし、二重封筒での返却とした。アンケート実施前に、長崎大学病院倫理委員会（課題名「当院における献血推進のための輸血後実態調査」承認番号 09062632-3）にて承諾をうけ、アンケート趣旨を理解していただける本人のみからの収集とした。

## 研究結果

アンケート調査の回収は、医学部保健学科全体（総数 459 名、看護科 306 名、理学療法科 76 名、作業療法科 77 名）のうち 85.2% (391 名)、看護科では例年より 81.7% (250 名) と低下していたが、理学療法 (93.4%、71 名)、作業療法 (90.9%、70 名) と高率であった (表 1)。

表 1 平成 26 年度アンケート回収率

2014年	合計	回収	未回収	回収率
OT(作業療法)	77	70	7	90.91%
PT(理学療法)	76	71	5	93.42%
看護	306	250	56	81.70%
合計	459	391	68	85.19%

性差は女 79.3%、男性 20.2% であり。年代は 10 代 37.1%、20 代 60.1%、であった。学年構成は、1 年～4 年まで、各々、26.3%、24.6%、26.3%、22.5% であった。回答者の出身地は都市部 63.7%、山間部 18.9%、農村 10.0%、離島 2.0% であった。

献血回数については、0 回が 80.3%、1～5 回が 16.1% (うち 1 回は 10.2%)。6 回以上が 2.8% であった (図 1)。

献血経験者の初回献血年齢は、20 歳未満が 67.6%、20～25 歳が 27.0% と、25 歳未満で 93.6% と占めた。

献血場所は献血ルームが 45.9% であったのに対し、献血車は 52.7% と多数を占めた。献血時の痛みの程度をフェイススケールで、0：全く痛みがない、1：ちょっとだけ痛い、2：軽度の痛みがあり、少し辛い、3：中等度の痛みがあり、辛い、4：かなりの痛みがあり、とても辛い、5：耐えられないほどの強い痛みがある の 6 段階評価では、1 が 70.3% と最も多く、2 が 16.2%、0 が 6.8%、3 が 5.4% であったが、4 も 1.4% いた (図 2)。

献血開始可能年齢（何歳から献血可能か？）について知っている者は 35.0%、献血採取量を知っている者は 57.0%、一度輸血した人が献血できないことを知っている者は 24.7% であった。更に輸血の既往以外の献血不可能な理由を知っている者は 58.8% であった。献血ルームの場所を知っている者は 44.5% であった。

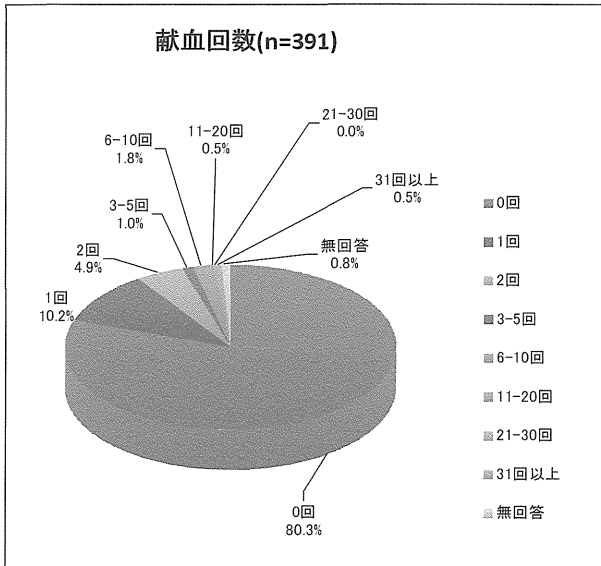


図1 献血経験回数

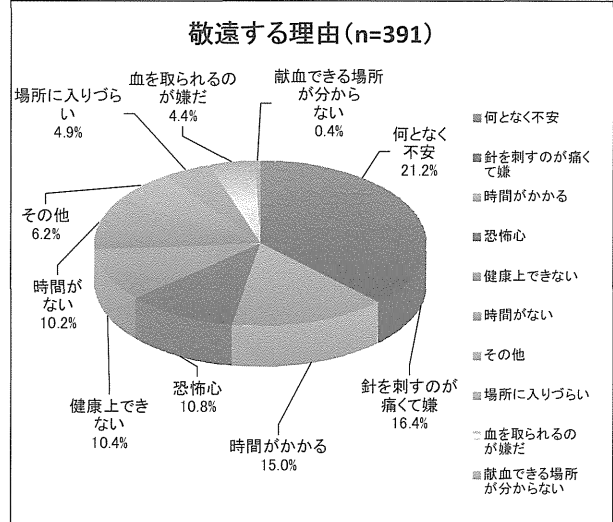


図3 献血を敬遠する理由

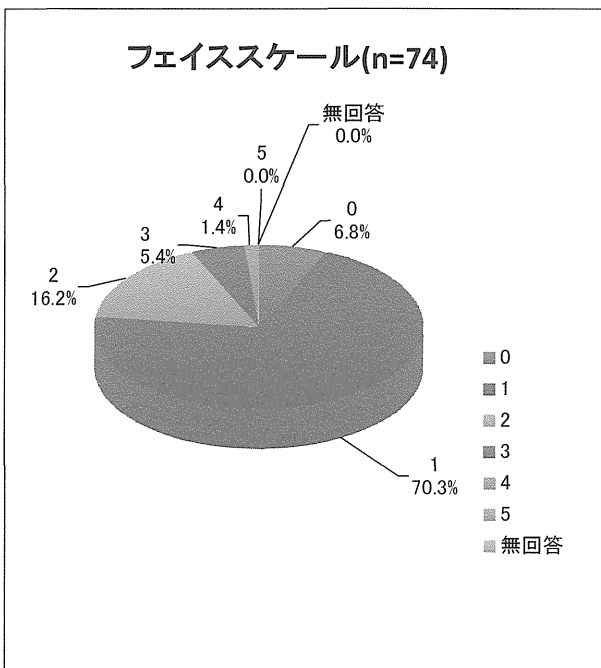


図2 フェイススケールによる献血時の痛み

献血を敬遠するかの設問には 57.8%がそう思うと回答し、その理由は、なんとなく不安(21.2%)、針を刺すのが痛くて嫌(16.4%)、時間がかかる(15.0%)、恐怖心(10.8%)、健康上できない(10.4%)、時間がない(10.2%)であった(図3)。

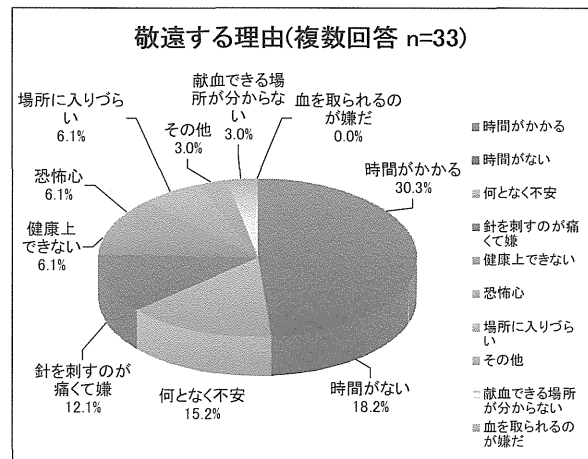


図4 献血経験者の献血を敬遠する理由(複数回答)

献血の経験の有無で分類すると、経験のある者の構成は男性 40.5%、女性 59.5%であり、献血を敬遠する者は、23.0%であった。敬遠する理由は、時間がかかる(30.3%)、時間がない(18.2%)、なんとなく不安(15.2%)、針を刺すのが痛くて嫌(12.1%)、健康上できない(6.1%)、恐怖心(6.1%)となっている(図4)。

経験のない者の構成は男性 15.6%、女性 84.1%であり、献血を敬遠する者は、66.3%であった。敬遠する理由は、なんとなく不安(21.5%)、針を刺すのが痛くて嫌(16.9%)、時間がかかる(13.8%)、恐怖心(11.4%)、健康上できない(10.9%)、時間がない(9.7%)、となっている(図5)。

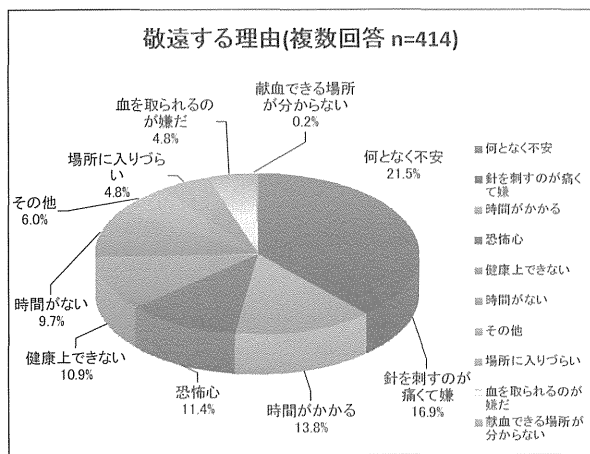


図5 献血未経験者の献血を敬遠する理由(複数回答)

献血経験の有無では明らかに、献血を敬遠する理由が異なっており、経験者は、時間がかかる・時間がないが最も大きな理由(48.5%)であり、何となく不安・針を刺すのが痛くて嫌・恐怖心・血を取られるのが嫌(33.3%)、健康上できない(6.1%)の順番であるのに対し、未経験者は、何となく不安・針を刺すのが痛くて嫌・恐怖心・血を取られるのが嫌(54.6%)、時間がかかる・時間がない(23.4%)であり健康上できない(10.9%)、場所が分からない・入りづらい(5.1%)であった。

献血の痛みの許容範囲の設問では、被験者全体で、0が5.1%、1が28.6%、2が46.5%、3が10.2%、4が0.8%、5が0.3%であったが、献血経験者では、各々、2.7%、33.8%、45.9%、14.9%、0%、0%であるのに対し、未経験者では、5.7%、27.7%、46.8%、8.9%、0.6%、0.3%であった。

輸血を受けたとして それぞれどのように感じるかの設問に対しては、①体調が良くなる(2.4)、②体に力が満ちる(2.1)、③心に力が満ちる(2.2)、④命が助かる(3.6)、⑤治療がうまくいく(3.3)、⑥必要でも輸血はしたくない(1.4)、⑦輸血は勿体ないから一滴も無駄にできない(2.6)、⑧時間がかかって苦痛だ(1.9)、⑨副作用が心配だ(2.7)、⑩病気感染が心配だ(2.9)、⑪献血してくれる人は善意がある(3.3)、⑫輸血を受けた人は献血した人に感謝している(3.2)、⑬献血の重要性が分かった(2.8)、⑭献血の重要性を知らない人が多い(2.9)であった。

血液製剤が輸血から作られていることを知っている者は、60.3%、献血に協力したい者は36.6%、はたちの献血キャンペーン、Love in Action、けんけつちゃんの認知度は各々、46.0%、25.8%、77.7%であった。

## 考察

平成26年度のアンケートの回収率は、看護学科が、前年95.8%から81.7%とやや低下したのに対して作業療法科、理学療法科では共に90%を越えており、献血アンケートの啓発が当学医学部保健学科全体に浸透していると思われた。献血をすすめる学生が平成24年、25年の19.0%、14.3%とやや低下しているものの、献血推進に協力をする希望を持つ者は36.6%と多かった。献血を敬遠する理由は、気分、身体的な痛み、時間的制約、身体的な制限など挙げられており、献血の経験の有無で検討すると、経験者は時間的制約が最も大きな理由であるのに対し、未経験者は不安、痛みなどが過半数の理由であった。

輸血をうけたと仮定した調査では、必要でもしたくない、時間がかかり苦痛だと設問には比較的否定的で、命が助かる、治療がうまくいく、献血した人に感謝するなどの設問に対して、肯定する回答であった。

## 結論

献血、輸血に関するアンケート結果は、経年経験した学年が3学年あり、設問内容もほぼ同様であるため、一部に献血に対する意識低下が見られたものの、平成24年から3年間続けて高回収率であり、献血未経験者が80%を越えるが、一旦献血を経験すると痛み、恐怖などよりも時間的制限が大きな障害となっている事が伺えた。

## 健康危険情報

該当なし

## 知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

(1) 論文発表

1. Akita S, Akatsuka M: Surgical debridement. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 19-24, Springer-Verlag, Heidelberg
2. Murakami C, Fujioka M, Akita S: How to manage radiation injuries. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 71-74, Springer-Verlag, Heidelberg
3. Akita S: Infection Context: Necrotizing fasciitis. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 83-87, Springer-Verlag, Heidelberg
4. Hayashida K, Fujioka M, Murakami C, Akita S: Toxic syndromes. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 105-108, Springer-Verlag, Heidelberg
5. Akita S, Houbara S, Akatsuka M: Imaging, vascular assessment: Extension in depth and vascular anomalies. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp 257-263, Springer-Verlag, Heidelberg
6. 秋田定伯: ケロイド・肥厚性瘢痕の評価・分類 - 国際比較 -, 傷あとケロイドはここまで治せる、小川令 (編集)、8 頁、in press、克誠堂出版、東京
7. 秋田定伯: 創傷治癒、TEXT 形成外科学 第3版、波利井清紀 (監修)、中塚貴志、亀井 讓 (編集) 7 頁、in press、南山堂、東京
8. Akita S, Houbara S, Hirano A: Management of vascular malformations. *Plastic and Reconstructive Surgery-GO* 2: e128, 2014
9. Tanaka K, Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A: Lipid-colloid dressing shows improved reepithelialization, pain relief, and corneal barrier function in split-thickness skin-graft donor wound healing. *International Journal of Lower Extremity Wounds* 13: 220-225, 2014
10. Houbara S, Akita S, Yoshimoto H, Hirano A: Vascular malformations that were diagnosed as or accompanied by malignant tumors. *Dermatologic Surgery* 40: 1225-1232, 2014
11. 松井 裕輔、三村 秀文、大須賀 慶悟、秋田 定伯、渡部 茂、力久 直昭、田中 純子、森井 英一、高倉 伸幸、佐々木 了: 血管腫・血管奇形の全国実態調査に向けての予備調査結果の報告. *IVR: Interventional Radiology* 29: 62-67, 2014
12. Akita S: Treatment of Radiation Injury. *Advances in Wound Care* 3: 1-11, 2014

(2) 学会発表

1. Akita S, Yoshimoto H, Yamanobe Y, Murakami R: Post-operative management by telemetry/tele-medicine system. 6<sup>th</sup> International Workshop on Wound Technology, Paris, France, January, 2014.
2. Akita S: Limitation of treating malignant wounds. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014
3. Akita S: Face, extremities, skin, soft tissue and bone, tumors, wounds and scars-benign or malignant?-Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014
4. Akita S: Guidelines in practice and theory in wound care-Japanese plastic surgeon's 3-year trait. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March,

- 2014
5. Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A: Analysis of efficacy of mesenchymal stem cell in pathologic environment. SAWC/WHS annual meeting, Orlando, Florida, April, 2014
  6. Yoshida S, Yoshimoto H, Akita S, Hirano A: Wound healing and angiogenesis through combined use of a vascularized tissue flap and adipose-derived stem cells in a rat hindlimb ischemia model. SAWC/WHS annual meeting, Orlando, Florida, April, 2014
  7. Akita S: Stem cell and radiation. The 12<sup>th</sup> Korea-Japan Congress of Plastic and Reconstructive Surgery, panel discussion, Songdo Convensia, Incheon, Korea, May, 2014
  8. 秋田定伯、吉本 浩、千住千佳子、平野明喜、藤岡正樹、林田健志、西條広人、桑原郁: Wound bed preparation を含めた創傷治療技術開発の基盤的教育プログラムの開発. 第 57 回日本形成外科学会、ミニシンポジウム、長崎、4 月、2014 年
  9. 秋田定伯、林田健志、吉本 浩、木下直志、吉田周平、平野明喜: 【熱傷基礎研究の最前線】急性放射線障害のメカニズムと治療方法の開発. 第 40 回日本熱傷学会、パネルディスカッション、埼玉、6 月、2014 年
  10. 秋田定伯、吉本 浩、吉田周平、林田健志、平野明喜: 【瘢痕の低侵襲治療】瘢痕を最小限度に導く工夫と分子基盤. 第 6 回日本創傷外科学会、パネルディスカッション、高松、7 月、2014 年
  11. 吉田周平、Rodrigo Hamuy、吉本 浩、秋田定伯、平野明喜: リンパ浮腫モデルにおける脂肪由来幹細胞を用いたリンパ管再生療法. 第 23 回日本形成外科学会基礎学術集会、シンポジウム、松本市、10 月、2014 年
  12. 秋田定伯: 創傷治癒、瘢痕、ケロイド、肥厚性瘢痕. 第 57 回日本形成外科学会、プレスカンファレンス、長崎、4 月、2014 年
  13. 秋田定伯: ガイドラインの作成と査読を通じて. 第 57 回日本形成外科学会、特別企画、長崎、4 月、2014 年
  14. Akita S: ressure ulcer pathophysiology in external force, strain, compression and undermining. 8<sup>th</sup> International Workshop on Wound Technology, Paris, France, January, 2015.



# 5

## 献血推進に向けた研修方法に関する研究

研究分担者：瀧川 正弘（日本赤十字社 血液事業本部）

研究協力者：青木亜希子（日本赤十字社 血液事業本部）

上瀧 達也（日本赤十字社 血液事業本部）

### 研究要旨

より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血者が減少傾向にあり、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進ボランティア等のスキル向上が不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが重要であることから、本年度において学生ボランティアの研修を重点項目とした。

### 研究目的

将来にわたり、需給の安定及び安全性向上の観点から、10代20代の献血者の増加及びその普及啓発に取り組むことが重要となっている。

しかしながら、平成25年度10代の献血率は6.3%、20代は7.1%と国が掲げる中期目標「献血推進2014」の20代の献血率(8.2%)の達成が厳しい状況となっている。このような状況の中、同世代からの献血協力を推進していくために、日本赤十字社で組織されている、全国学生献血推進実行委員会の学生から同世代の目線から見た血液事業内容の訴求される項目が重要である。同委員会が企画、運営する全国統一クリスマスキャンペーン献血推進など、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、学生ボランティア等のスキル向上が必要不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが目的となる。

### 研究方法

献血者数の減少傾向が続いている若年層（10代・20代）への取り組みとして、同世代からの献血啓発等の働きかけを強化し、将来の献血基盤を構築することが重要であることから、全国的に組織されている学生献血推進ボランティアを対象とした研修スキームの充実を図り、より能動的かつ有効な献血推進活動に繋げるために「平成26年度全国学生献血推進

代表者会議」(平成26年8月20日(水)から22日(金):大阪府90名参加)を実施した。

### 研究結果

研修会の内容は以下の通りである。

#### ① 「血液事業の現状について」

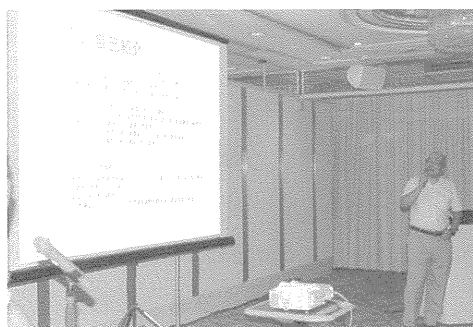
血液事業本部 献血推進課長より、採血事業者である日本赤十字社から、最新の献血の現状と、学生ボランティアの関わりについての情報提供を行った。



#### ② 体験発表による意識向上

高等学校の教諭である松下公昭氏より、平成21年5月に急性骨髄性白血病を発症し、主治医の告知から、自身の死に対する恐怖と不安定な精神状態に苛まれながら、治療を支えてくれた家族や病院スタッフへの感謝と、治療のため輸血用の献血をしてくれた多くの人々に対する感謝の気持ちを受血者の立場から献血という行為の素晴らしさ

や重要性を学生ボランティアに訴え、そのボランティアに携わる学生にエール送った。また、完治後は、学校教育で「いのちの大切さ」を持ち教鞭にたっており、各地で講演も行っている。



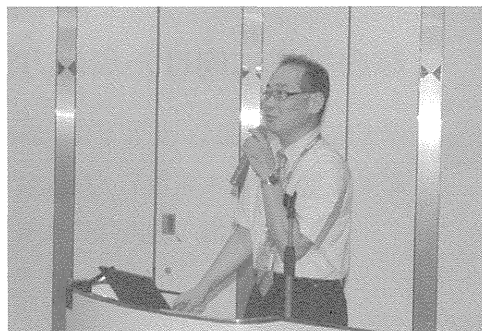
### ③ 学生献血ボランティア OB から見るボランティアの課題

現民放ラジオ局報道制作に携わる林輝氏より、自身の献血ボランティアの活動と社会人となった立場から OB としての献血の関わりや役割の講演があり、大学生活においてかけがえのない活動に誇りを持って進むべきとの提言があった。



### ④ 学生から今回会議のテーマになる「意識改革」の講演

医療系企業に勤務されている二村祥之氏より、「組織における『意識改革』の取り組み」講演を通し、自分たちの組織をいかにスキルアップするために必要な意識改革を、実践的な内容から、学生に対し、その期待感と今後なすべき事の提言があった。



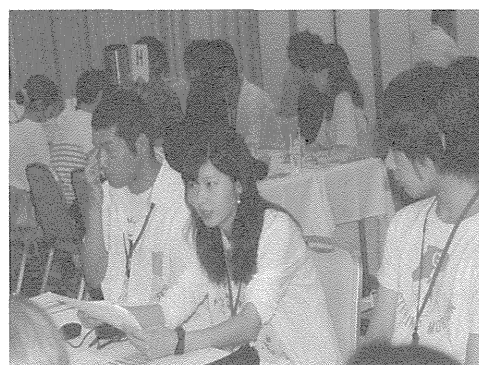
### ⑤ 分科会討論 テーマ『意識改革』

各グループに分かれ意識改革を意識しながら、7項目の議題を討論し、その内容をグループごとに発表した。

#### 【討論・発表例】

#### ●学推内の後輩育成について

- ・後輩育成には環境を整える必要がある。
- ・環境を整えるには・・・
  - 1) 自分自身を変えていく
  - 2) 自分自身が積極的に動く
  - 3) 尊敬される先輩になる
- ・組織の環境を変えていく
  - 1) 楽しく活動できる環境づくり
  - 2) マニュアル化し引継ぎをしやすいように



#### 考察

今回の研修会については、代表学生が率先として

テーマや討議内容の検討を積極的に行ったことが参加者に共鳴を受け、今学生にあるべきボランティアの姿、後輩の育成及び、献血を学生からいかに発信し、若年層の献血向上に向けるか、その活動が少子高齢化を迎える日本の血液事業に対する貢献、将来においても輸血用血液が安定供給できる社会の構築を成す為、敢えて自分たちの組織とはを再考するテーマを掲げ、研修会の実施に至ったと考える。

## 結論

全国の学生ボランティアが、研修の在るべき姿を自ら模索し、テーマを掲げ、実行出来る環境が整ってきた。

また、この研修を終えた人材が各地に戻り、若年層への献血思想の普及啓発のイベント（Love in Action 等）へ直接参画することで、同世代への訴求をより具体化した内容に変化させ、新たな若年層への行動を起こす流れが出来つつある。

今後我々は、この組織が更に成熟するための研修方法を進めていかななくてはならない。

## 健康危険情報

該当なし

## 知的財産権の出願・取得状況

該当なし

## 研究発表

該当なし

